夏の風をやませ風、又ながせ風、又せた風、播磨邊又四國にて、春南風にて雨を催す風をやうずと云、越後にて東風をだしといふ、西北の風を玄もにしといふ、西南の風をひかたといふ、

〔書言字考節用集一乾坤〕颰（コガラシ）風過木上曰颰、字彙疾風、　木枯同本朝俗謂冬時疾風爲木枯、　凩同本朝俗字

〔圓珠庵雜記〕こがらしは今木枯の意なり、からすとは葉を吹きしをりて、枯木のごとくなすなり、六帖に、木がらしの音にて秋は過ぎにしを今も梢にたえずふくかな、とよめる歌は、秋の風をこがらしといふよしによめり、○略中　野宮歌合に、○略中　正通は木がらしとは冬の風をこそいへ、此頃の風をいかゞ、冬のあらしを秋の初風といへるにやあらんと難じけれど、猶負にさだめらる、されど冬の風をこそいへといへるをば、然らずともいへる事はなければ、そのころも大かたは今のごとく冬の物としけるにこそ、

〔倭訓栞前編古九〕こがらし　木嵐の義なるべし、木枯にはあらじ、嵐をからしとよむは音便也、五十嵐をいがらしとよむも同じ、字書に風過木上曰颰とみゆ、颰も同じ、凩は倭の俗字也、歌に冬によめり、又秋にもよめる事は、野宮歌合の順の判に、六帖の歌を引て證せり、

〔源順集〕むしのね　　但馬

淺茅生の露吹むすぶ木枯にみだれてもなくむしの聲哉○略中

此虫のねの歌、露吹むすぶ木枯のなどいへるわたり、いひなれたりなどさだむるほどに、正通が申やう、木枯とは冬のあらしをこそいへ、この比の風をいはゞ、雨をば時雨とやいふべからんといふを、きこしめして、みすのうちにこれかれかゝる事をいふことをこそは、ためしにひかめとて、

木枯の秋のはつ風ふかぬまになどか雲ゐにかりのおとせぬ

又